

次郎長

次郎長翁を知る会
会報 第23号
平成20年6月12日発行
発行所 〒424-0821
静岡市清水区相生町6-17
(財)静岡観光コンベンション協会
清水事務所内
TEL (054) 352-7331
発行人 竹内 宏
編集人 田口 英爾
印刷所 (株)ニシガイ
TEL (054) 352-2188

次郎長の墓碑名書いた

榎本武揚没後一〇〇年

「書くものじゃ降参だ。おれは実に手が悪いからな」と言った榎本武揚。その榎本に「俠客次郎長之墓」と揮毫の筆をとらせたのはおちようさんの涙だった。

今年榎本武揚が亡くなって一〇〇年の年である。武揚は明治四十一年（一九〇八）十月二十七日、七十三歳で没。海軍葬を以て東京駒込吉祥寺に葬られた。

梅蔭寺にある次郎長墓の墓碑銘「俠客次郎長之墓」は、榎本武揚の揮毫によるものだ。めったに

俠客次郎長之墓・武揚（書）梅蔭寺



榎本武揚（1836—1908）

筆をとらない榎本が揮毫に応じたのは、彼が次郎長に大きな恩義を感じていたからである。

あの咸臨丸事件。明治元年（一八六八）九月十八日、清水港に碇泊中の咸臨丸は新政府軍に攻撃され、乗組んでいた徳川軍の春山弁蔵ら七名が戦死、「賊軍に加担するものは断罪に処す」のお触れ

を恐れず、次郎長は「死ねば仏」と港に浮遊する戦死者の遺体を丁寧に葬った。

咸臨丸は北海道に新天地を求め、函館を目指した榎本艦隊の一隻である。

戊辰戦争の最中、明治元年八月十八日、徳川旧幕府海軍副総裁榎本武揚指揮のもとに開陽丸、回天丸、咸臨丸、蟠竜丸、千代田など八艦は品川を出帆、途中房総沖で台風に遭い各艦離散、なかでも老朽の咸臨丸はメインマストを切倒し、辛うじて沈没をまぬがれて漂流、清水港によりやく入って修理中を官軍に見えられて攻撃を受けたのである。

賊軍と呼ばれた自分の部下たちを、咎めを恐れず手厚く葬った次郎長の義拳は、榎本ばかりでなく、山岡鉄舟ら多くの幕臣たちの心を動かした。

次郎長が明治二十六年六月十二日、七十四歳で亡くなった時、すでに鉄舟はこの世になかった。

次郎長を看取ったおちよう（三代目）は、納骨に際して墓碑銘の揮毫は、榎本武揚にと迷うことなく心に決めていた。

明治二十七年一月、榎本武揚は農商務大臣に就任。おちようは上京して大臣官邸に榎本を訪ねた。その時のやりとりは後の回想談（次郎長十七回忌の明治四十二年、「報知新聞・静岡版」に連載された『俠客寡婦物語』）に詳しい。

おちようが取次の書生に、「清水から長五郎の婆が参ったと取次いで下さいな」と言うのと、「そりや珍しい人が来た」とかで、入れ代わり立ち代わりの客がまだ三人待っているにも拘らず、ニコニコと会ってくれ、「はるばるよく来てくれた。

何かわしに用でも」と気軽に申されましたから、「実は御前にお願いがあって」と一筆書いて頂きたいことを述べますと、榎本さんはみな迄聞かないうちに手を横に振り、「書くもんじゃ降参だ。実に手が悪いからな」と折角だがこれだけは、と断わられた。しかし、おちようは重ねて「長五郎の一周忌に石碑を建てるんですから」と涙と共に申し述べると、榎本の様子が急に変わった。

「ウム、そうか。そんなら書くとも、喜んで書く。頼まれなくとも書いてやりたいくらいじゃ。とい

「^{やせがまん}瘦我慢の説」と碑文の読み

咸臨丸殉難者慰霊碑

榎本武揚の手跡による碑は、当地にはもう一つある。興津清見寺の咸臨丸殉難者慰霊碑として知られる石碑だ。明治二十年、旧幕臣たちによって建てられたその碑は表面は本堂の側を向き、山門から入った人には裏面がすぐ目に入る。

高さ三メートルはある大きな碑面いっぱい彫られているのは、「食人之食者死人之事」という九文字に続き、揮毫した榎本武揚の名である。

史記淮陰侯列伝から引用した九文字は、「人の食を食む者は、人の事に死す」と読む。「徳川氏の食を食む者は、徳川氏のために死す」の意である。

この碑が広く世に知られるようになったのは、福沢諭吉による「^{やせがまん}瘦我慢の説」からである。

明治二十三年、福沢は家族とともに東海地方に遊び清見寺を訪ね、境内に建てられたこの碑を見た。

うのも、長五郎には多くの友達が大変世話になった義理もあるからな。」

こう言って引受け、墓碑に書く文字も、ずばり「俠客次郎長之墓」ときまつた。榎本はさらに言う。「俺は大変手が悪い。これから三十日ぐらい手習いの間がほしい。手は悪くても、親分のためにきつと書いて送ってやるから安心せい。」

次郎長没後百十五年、平成二十年の今も香華の絶える暇のない次郎長墓の碑銘は、こうして出来上ったのである。

「榎本氏はかつて徳川家の食を食む者にして、不幸にして自分は徳川の事に死するの機会を失うたれども、他人の之に死するものあるを見れば、慷慨惆悵、自から禁ずる能はず、欽慕の余り、遂に右の文字を石に刻したることならん。」

福沢はこのように考え、明治政府に仕え高官となった勝海舟と榎本武揚を批判し、二人に質問状を發した。

これに対して勝は、「行蔵は我に存す、毀譽は他人の主張、我に与らず我に関せずと存じ候」と、榎本は「昨今別して多忙につき、いずれそのうち愚見申し述べべく候」とそれぞれ返事を出した。これが明治のジャーナリズムを湧かせた「^{やせがまん}瘦我慢の説」である。

先に記したように、清見寺にこの石碑が建てられたのは、明治二十年である。編集子の手もとに一冊の薄い和紙で綴じられ、表紙に「咸臨艦殉難

諸氏記念碑落成報告」と題された史料がある。奥付には「明治二十年七月」に並んで発起人総代として「渡辺忻三・小林一知」の氏名と朱印が押されている。氏名の一人小林一知は、明治元年清水港で官軍の攻撃を受けた咸臨丸の艦長である。この報告書には、明治二十年四月十七日、興津清見寺で除幕された慰霊碑の計画から完成に至る詳細な経緯が記されている。さらに巻末の付図には、碑の表側の銘文と、裏面の榎本武揚が揮毫した碑文の縮図が収められている。(次頁参照)

報告書に書かれている主なことを左に記す。

○建碑の計画は明治十七年、咸臨丸事件から十七年の年忌に当る年の四月、募金が始められた。

その年の九月に碑をたて、慰霊祭を行う予定であったが実現されず、三年の年月が流れた。

○碑は初め、壮士之墓に隣接して建てられる予定であったが、当時清水港は横浜と結ぶ茶輸出の中継港として目ざましい発展を上げつつあり、早晚市街の景況一変するのではないかとこのことから、別の場所を探すことになり、明治十八年三月、興津清見寺淨見菩薩住職の許可を得て同寺境内に建碑と決定した。

○篆額は大鳥圭介(元老院議員)、碑文は永井尚志(号介堂、元老院議員)にそれぞれ依頼。

○題額は初め榎本武揚を予定していたが、当時清国全權大使として出張中だったため諦めていた。石碑は明治十九年十月、碑文の鐫刻を完了していたが、ちょうど帰国した榎本に揮毫を乞うたところ快諾、「食人之食者死人之事」と大書、祭典に間に合うよう裏面に彫られた。

○明治二十年三月、義捐金募集が終る。応募人員一八三名。募金額六〇二円二〇銭。

○二十年四月十七日(徳川家康命日)、除幕・法要の祭典には、旧幕臣ら約百名が参列、ほかに地元町民ら数千人を加えて清見寺境内は立錫の余地がないほどであった。

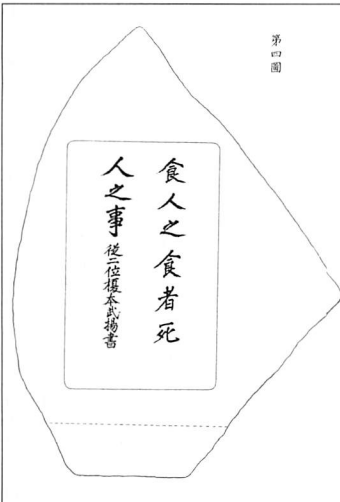
○焼香者は、小林一知(咸臨丸艦長) 春山知安(咸臨丸副長故春山辨蔵長男) 澤太郎左衛門、荒井郁之助、肥田浜五郎、永峰弥吉ら旧幕臣に混じって、次郎長こと山本長五郎の名が見える。

咸臨丸殉難者慰霊碑・清見寺

第三圖



第四圖

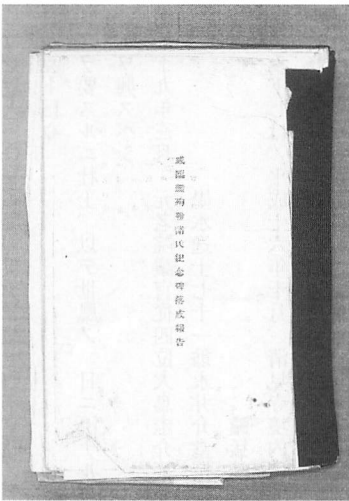


○清見寺での式典が終わり、午後三時頃、発起人有志たちは人力車に乗り下清水村の梅蔭寺に移動して法事を行った。隠居の宏田和尚が健在、咸臨丸事件当時、和尚は死屍埋葬説経を行って次郎長を助けた人である。

○この梅蔭寺での法要には、盲人となった三濃輪町の小林久右衛門が子どもたちに手を引かれて参列した。十七年前、久右衛門は港に碇泊中の船舶に物品販売する商いを業とし、咸臨丸が官軍から砲撃を受けた時、ちょうど艦内に居合わせていた。彼は一部始終を記憶した通り、梅蔭寺で参列者たちに語った。思わぬ咸臨丸事件目撃談は、人びとの涙をさそった。

○建碑に併行して、向島の壮士之墓の周囲に玉垣が設置された。巻末の付図によれば、玉垣の石柵には「舊友建之」の文字が刻まれた。後に次郎長が自分の一人に、「親分、これは何と読むんだ」と聞かれ「旧友^{きゅうゆう}これを建つ、と読むんだ」と答えたとの逸話が残されている。昭和四十年

咸臨丸殉難諸氏慰霊碑落成報告



代改修の際、この貴重な文化財ともいえる玉垣は取り毀され、痕跡すら残されていない。

碑文の読下し

平成十七年一月、東京三越劇場で加藤剛主演の「次郎長が行く」の上演があり、幕あけ前の十六年十月に、次郎長役加藤剛、愚庵役頼三四郎さん親子が墓参のため清水を訪れた。同行者は成城大学で頼さんのゼミの教授宮崎修多先生。三人は清見寺を訪ねる。咸臨丸慰霊碑の前に立つと、宮崎先生は突然、「王政維新の歳秋八月」と碑文を読み始めた。居合わせた編集者は、必死になってメモを取る。メモをもとに清水郷土史研究会の会報「清郷研」に「咸臨丸殉難者碑文を読む」を発表した。誤植を修正し、これを以下に再録する。

王政維新の歳秋八月、徳川旗下ノ諸士隊卒、私ニ誓ウ所アリ、開陽・回天・咸臨・蟠龍・千代田・長鯨・美加保・神速ノ諸艦ニ駕シ、同ジク品川ヲ発シ、北ノカタ仙台に赴ク。房總海ニ到リニワカニ颶風ニ遇イ、各艦離散シ相失ウ。咸臨艦ソノ大櫓ヲ截リ、ワズカニ覆没を免ル。更ニ進路ヲ案ジ、再ビ図リテ北駛スルニ暴風マタ起リ南洋ニ漂蕩ス。艦体毀損シ遠航スル能ワズ、遂ニ駿河清水港ニ入ル。桁ヲ卸シ綱ヲ解キ、略修理ヲ加エント欲ス。而シテ北ノ官諜^{くわんて}シテ之ヲ知り、富士山・武蔵・飛龍ノ三艦ヲ遣シテ来撃ス。発砲甚ダ急ナリ、飛龍艦ノ兵鎗銃ヲ執リ超エテ艦中ニ入り、艦ノ副長春山辨蔵、士官長谷川得蔵、准士官長谷川清四郎、春山鑽平、加藤常次郎、今井幾之助、及ビ水兵若

千格闘シテ之ニ死ス、実ニ九月十有八日ナリ。官艦ハ咸臨ヲ曳キ以テ去ル。而ルニ死屍海ニ浮カブコト累日、人ノ敢エテ之ヲ斂ムル者ナシ、土人山本長五郎ハ俠士ナリ。夜港中ニ索メテ七屍ヲ得、ヒソカニ載セテ向嶋ニ至リ、古松樹ノ下ニ埋メ、石ヲ建テ之ヲ表スルニ題シテ壮士ノ墓ト曰ウ。今茲旧友相謀リテ碑ヲ清見寺内ニ建テ、具ニソノ顚末ヲ記シ以テ不朽ニ伝ウ。之ヲ系ルニ銘ヲ以テス。ソノ辞ニ曰ク

清五郎ご子孫の墓詣で

三月のある日、梅蔭寺に若い夫婦連の墓詣り客が訪れた。生憎編集子は不在だったが、後から聞いた話によると、次郎長の客分「清五郎」の御子孫とのことである。

清五郎は次郎長の先輩高萩萬次郎の身内であるが、次郎長の家に逗留中、明治四年一月十一日他界した。立派な葬儀が梅蔭寺で行われ、墓も建てられた。今、次郎長の墓に隣接し、大政、小政、仙右衛門の墓の傍に「乾叟清元上座」と刻された清五郎の墓がひっそりと建っている。過去帳には「俗名清五郎 行年六十一歳 上町次郎長客」とある。

その御子孫の墓参と聞き、編集子は早速、問い合わせた。清五郎の故郷埼玉県飯能市双柳に清五郎の菩提寺秀常寺があり、門前に清五郎の子孫都築信太郎さんが住んでいる。そのことは三十年ほど前に出版された「増田友哉著・清水次郎長とその周辺」に記されている。

コレ義人、コレ頑民、幾テ守節ト曰イ、貶メテ吠堯ト曰ウ
之ヲ要スルニ壮士、以テ世風ノ 日ニ洗ナルコトヲ興スベシ

明治十九年三月 元老院議官従四位大島圭介篆額

墨水逸士七十一翁永井介堂撰書

鱷 猛 鱗 鰐

(読み下しは、平成十六年十月、清見寺境内にて、宮崎修多成城大学教授の口述による)

ちやうど相前後して講談の馬琴師匠から電話があり、六月某日飯能で公演があるとのこと、次郎長関連の高萩萬次郎や清五郎についてお尋ねがあった。私は偶然の不思議に内心驚きながら、清五郎のこと、双柳の読みは「なみやなぎ」であることなどをお知らせした。

ところで、渡世人時代の次郎長は、高萩の萬次郎を頼りとしていた。「東海遊俠伝」の中でも二度重要な場面で子分を連れ萬次郎の家に厄介になった。一度は庵原川の仲裁の後、小田原の佐太郎の所で衣服を失い、一行四人が裸道中で萬次郎の家にころがり込む。この時登場するのが清五郎だ。

もう一度は、乙川噺で久六を討った後、大政、石松など子分たち六人を引連れ、萬次郎を頼る。

萬次郎をこれだけ頼ったのは、その女房が駿河出身の人だったからである。ちなみに、次郎長とおちやうの顔写真は同じものが、おちやうの子孫入谷家、萬次郎の子孫清水家、清五郎の子孫都築家にそれぞれ残されている。

秋の次郎長ツアーは京都 愚庵を訪ねて嵯峨鹿王院へ

險の父母妹を尋ねて放浪遍歴した天田愚庵は、その晩年は仏門に入り、京都で骨を埋めました。嵐山に近い鹿王院には、天竜寺に納められていた愚庵の遺骨および、父母妹の法名と、辞世「大和田の島もあらなくに梶緒絶え、漂ふ舟の行方知らずも」が刻まれ収められた墓石が建てられています。その墓参と、愚庵が京都で過ごした清水三年坂の庵跡を訪ねます。

日時 十一月二十六日(水) 泊

参加費 三万円(予定)

日程 十一月二十六日朝バス出発

京都妙心寺花園会館泊、二十七日帰着

●お問い合わせ

観光コンベンション協会清水支部内、次郎

長翁を知る会事務局へ

TEL 〇五四―三五二―七三三一

編集室から

●前号の「次郎長フォーラム特集号」に続き会報二十三号をお届けします。今年は次郎長の墓碑銘を揮毫した榎本武揚が亡くなって(明治四十一年)ちやうど一〇〇年になる特集です。

●五月十一日、次郎長道中保存会(会長吉井靖)による次郎長フェスタが次郎長通りで復活開催されました。久しぶりに見る二十八人衆の次郎長道中。やっぱりこれがなくては。